

ピアノのお話XI

すでにお話しましたように、ピアノという楽器が今のような姿や性能を備えたものになったのはおよそ 1830 年前後のことでした。1830 年というと、ベートーヴェンは死んで 3 年経っています。シューマン、ショパン、リストなどはおよそ 20 歳ということになります。これからあとに出てくる人はピアノという楽器の醍醐味を味わえることになります。

それ以前の音楽家でピアノの演奏家と呼ばれた人には、モーツァルト（1791 年没）やベートーヴェン（1827 年没）といった超有名人も含まれていますが、この人たちの弾いたピアノは今から見るとずっと不完全なものでした。たとえばモーツァルトの使ったピアノの音域は狭く、最高音は



声の一番高い音と同じくらいです。モーツァルトの書いたピアノ曲には、これ以上高い音はありません。ところが今のピアノはこの音より上にさらに 1 オクターヴと 5 度（鍵の数でいえば 19 箇所）もあるのです。

モーツァルトは将来もっと立派な楽器ができるのを知らなかったとは可哀想だね、とおっしゃいますか、いえ、どういたしまして、彼の考える“音楽”とは、自然界にごく自然に存在する音の世界のことでしたから、人の声の出せる範囲の音しか使おうと思っていませんでした。だから、たとえば、ヴァイオリンのような楽器はもっとずっと高い音が出せるのですが、そういう音を使うようになるのはアクロバットの技術を持った天才パガニーニよりあとのことで、モーツァルトはそんな人工的な音は使おうとしませんでした。彼のヴァイオリン協奏曲の中の最高音は先ほどのピアノの最高音の 3 度上のイの音です。つまり、出せば出せるのに、それ以上の高い音を使わなかったというのは、18 世紀と 19 世紀の“音楽”に対する考え方や感じ方の差からくるものです。18 世紀においては音楽の主役は人の声でした。オペラと教会音楽という人の声による音楽が音楽でありました。では楽器は何だったのか、といえばそれは声楽やダンスの伴奏をするためのものでした。ではオーケストラは？ はい、オーケストラも主な任務はオペラやダンスの伴奏でした。

ではピアノは？ はい、ピアノは 18 世紀の前半には使われませんが、その前身のチェンバロ（クラヴサン、ハープシコード）が使われていましたが、これの用途は主として貴族の館で女性の方たちの歌うお歌の伴奏でした。チェンバロは優雅な音色を持っている上に音が小さく柔かいので貴婦人のお部屋にふさわしいとされたのです。この楽器のために 500 曲ものソナタを書いたドメニコ・スカルラッチィはポルトガルの王女（のちスペイン王妃）マリア・バルバーラの音楽の先生として彼女に仕え、彼女のために 28 年にわたって優美な音楽を書き続けたのでした。（つづく）



執筆／石井宏（音楽評論家）

1930 年、東京生まれ。音楽評論家、作家、翻訳家。東京大学文学部美学科および仏文科卒。

主な著書に、山本七平賞を受賞した『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』をはじめ『素顔のモーツァルト』、『誰がヴァイオリンを殺したか』、『帝王から音楽マフィアまで』、『ベートーヴェンとベートーヴェン 神話の終り』、『チョッちゃん』、『ホテル帰る 特攻隊員と母トメと娘礼子』（共著）などのほか、主な翻訳書に『モーツァルト』、『モーツァルトのオペラ』、『グスタフ・マーラー 愛と苦悩の回想』、『モーツァルト 音楽における天才の役割』、『モーツァルトは「アマデウス」ではない』など。